

2) 基本的な考え方

全社会的に取組を進めるべき「地球環境保全」は、札幌都心部のまちづくりを進めていくうえでも、必ず意識しなければならない課題である。そして、今や、環境問題に対する社会的責任が企業活動においても重要な位置を占めてきている中で、札幌が国内外からの投資を呼び込むためにも、その“玄関口”である札幌駅交流拠点の役割は極めて重要である。

折しも、札幌駅交流拠点周辺では、以前より地域熱供給など先進的な取組が進められてきており、より先進的な環境低負荷型のまちづくりを推進していくうえでのベースが整っているエリアである。

これらのことから、今後は、これまでの取組をベースとして、自然環境が充実している北海道・札幌の魅力を端的に表現するとともに、北海道の冷涼な気候を最大限に活かした環境技術の導入・アピールや太陽光などの再生可能エネルギーの積極的な活用など、札幌駅を降り立った人々が「環境首都・札幌」を実感できる、シンボリックな空間形成を目指していくことが必要である。

さらには、札幌駅交流拠点はもとより都心全体として、先進的な省エネルギーシステムと、東日本大震災によりその重要性が再認識された防災機能をあわせ持つ、分散型エネルギー供給拠点を活用したスマートエネルギーネットワークの構築や、公共交通機関の利用促進を促す札幌駅交流拠点への路面電車の延伸なども、同時に図っていくべきである。

以上のことから、“環境首都・札幌の実践空間の形成”に向けた取組として、次のような方針を設定する。

- ① 豊かなみどりを備えた拠点の創出
- ② 環境低負荷型のまちづくりの先駆的な展開

3) 具体的な取組イメージ

① 豊かなみどりを備えた拠点の創出

みどりは、都市の景観や憩いといった面で重要な要素であるとともにCO₂の吸収源であり、都市気候を緩和する機能を通じて間接的に冷暖房等に起因するCO₂排出量を低減する効果がある。

今後の再整備が見込まれる街区においては、公開空地などによる緑の空間の確保や駅前広場等の公共空間における豊かな緑を備えた拠点の創出を図る。

また建物の屋上緑化や緑陰道路の整備など街路の性格に応じた緑化の推進を図る。

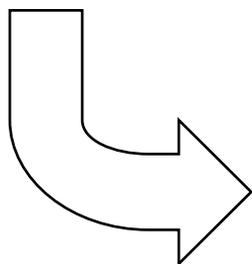
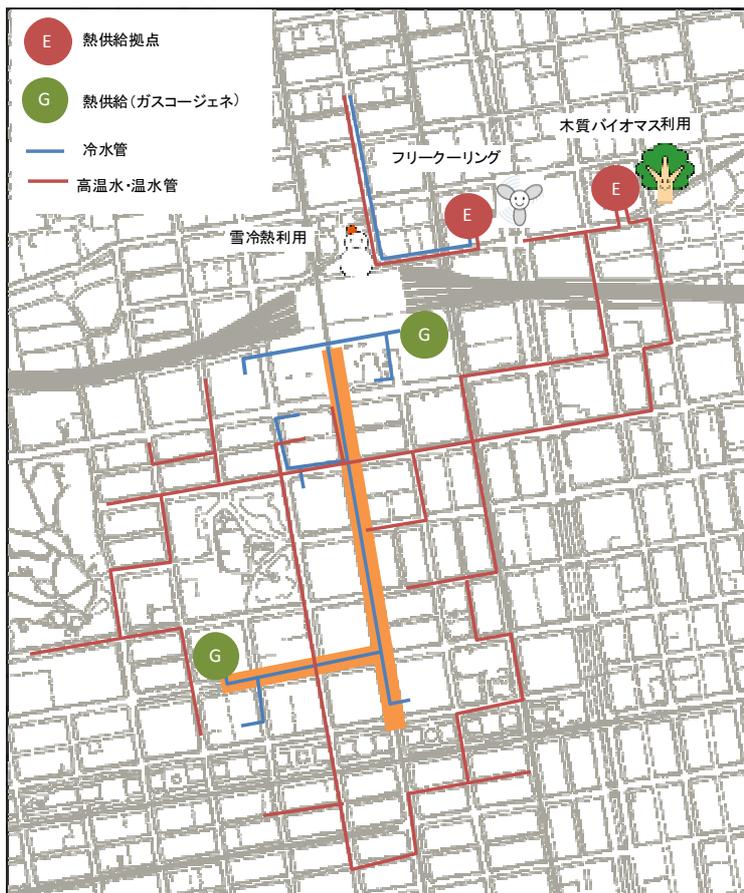
② 環境低負荷型のまちづくりの先駆的な展開

「環境首都・札幌」の玄関口にふさわしい、低炭素都市づくりのショーケース・牽引役として、札幌市温暖化対策ビジョンに掲げる「2020(平成32年)に温室効果ガス排出量を25%削減(1990年比)」の実現に向け、環境低負荷型のまちづくりの先駆的な展開を図るとともに、その取組を広く国内外にPRしていく。

具体的には、既の実施しているものを含めて、次のような取組を実践する。

- ・ 太陽光発電や積雪寒冷地ならではの雪冷熱エネルギー、寒冷地に適した冷暖房システムである地中熱ヒートポンプなど、再生可能エネルギーの積極的な導入
- ・ 北海道が豊富に有する森林を活かした木質バイオ燃料等の地域熱供給プラントなどでの積極的な活用、利用拡大
- ・ 高密度・複合的土地利用展開によるエネルギー需要密度の向上やエネルギー需要の平準化
- ・ 地区単位でのグリーン電力の購入など、北海道の自然・再生可能エネルギー活用への貢献
- ・ 分散型エネルギー供給拠点の整備によるスマートエネルギーネットワークの形成・活用及び防災機能の向上
- ・ 路面電車などの公共交通の利用促進
- ・ CO₂排出量の「見える化」

現状のエネルギーネットワーク



エネルギーネットワークの展開例イメージ



(4) 『交通』“北海道・札幌の玄関口としての「交通結節点」の形成”に向けた取組

1) 基本（現状）認識

【札幌都心部における交通施策の考え方】

札幌都心部の交通に関する考え方は、「都心まちづくり計画（H14）」の方向性を受けた、「都心交通計画（H16）」において“人や環境を重視し、都心の活性化を目指す”という計画理念が打ち出され、これを達成するために、公共交通を軸とした交通システムの充実、適正な自動車等の利用による交通の円滑化、道路空間の再配分による都心再生の具体化、といった方針が策定されている。

北海道・札幌の玄関口としての「交通結節点」の形成について検討するにあたっては、基本的にこの考え方を踏襲しつつ、札幌駅交流拠点周辺を取り巻く現実的な交通課題に対応していくことが必要である。

【札幌駅交流拠点の現状】

札幌駅交流拠点におけるJR及び地下鉄の乗車人員（平成20年度）は、JR札幌駅が8.6万人/日、地下鉄さっぽろ駅では南北線が6.1万人/日、東豊線で2.7万人/日となっている。

駅前広場は、平成10年に北口（約19,500㎡）、平成12年に南口（約19,000㎡）が整備されている。

北口広場は、ゆとりのある交通機能を持った「交通広場」として位置づけられ、バス、タクシーに加え、自家用発着場および地下駐車場を備え、主に自動車類によるアクセス機能を重視した機能配置となっている。

南口広場は、旅立ち、帰着としての空間、人々が出会い、滞留する空間として、人々の様々な生活が展開される「人の広場」と位置づけられており、交通機能に加え、人を中心としたオープンスペース確保に重点が置かれ、都心部の正面性を高める空間形成が図られている。



交通施設配置状況

▼札幌駅北口駅前広場



▼札幌駅南口駅前広場



【札幌駅北口】

- ・北口駅前広場 1998年（平成10年）4月供用開始、駅前広場総面積／約19,500㎡
- ・バス乗降場 … 1998年（平成10年）4月開業、5バス（待機10バス）
- ・タクシープール … 40台
- ・自家用乗降場 … 10台
- ・一般駐車場 … 北口地下駐車場、230台

【札幌駅南口】

- ・南口駅前広場 … 2000年（平成12年）3月供用開始、駅前広場総面積／約19,000㎡
- ・JR札幌駅 … 1880年（明治13年）11月開業、乗車人員8.6万人/日（H20年度）
- ・地下鉄 南北線 さっぽろ駅 … 1971年（昭和46年）12月開業、乗車人員6.1万人/日（H20年度）
- ・地下鉄 東豊線 さっぽろ駅 … 1988年（昭和63年）12月開業、乗車人員2.7万人/日（H20年度）
- ・バスターミナル … 都市計画決定(S51.5.18)、1978年（昭和53年）9月開業
19バス（発着1,779便/日）
- ・タクシープール…45台